

29.3.2

富山新聞

# 夢二の渡米 詳細に

## 高志の国文学館

### 客船内で個展 翁久允が書簡

立山町出身のジャーナリスト翁久允が、大正ロマンを代表する画家竹久夢二を誘って1931(昭和6)年に渡米した際、客船内で夢二の様子を記した書簡が新たに見つかった。書簡は翁が家族に宛てたもので、船内で夢二が個展を開いたことが書かれていた。夢二や二人の交流を示す新たな記録の発見が期待できることから、富山市の高志の国文学館は新年度、今回の書簡を含め、翁の親族が保管している未整理の資料約1万点の本格調査に乗り出す。

### 未整理資料1万点を調査へ

書簡は翁が31年5月7、14日に客船「秩父丸」で夢二とハワイに向かった際、家族に宛てた。船内で提供された食事のメニュー表を便せん代わりにし、同11日に船内で日本文化を紹介する「日本座敷」と呼ばれたコーナーで、夢二が個展を開いたと記していた。翁は当時、夢二に対して米国で絵画を売り込んではどうかと誘い、夢二が快諾したことで渡米が実現したとされる。夢二はハワイ到着後、米国で発行された日系人向けの新聞記事にハワイで個展を開いたことが紹介されている。ただ、現時点で確認されている渡航時の資料は少なく、書簡の事前調査を実施した高志の国文学館の小林加代子学芸員は「夢二にとっては初の渡米。船内に多くの外国人客に自分の作品を見せたかったのかも



翁久允の未整理の資料を確認する小林学芸員  
—富山市の高志の国文学館

れない」と話す。

同館は昨年に企画展「夢二の旅—たまき・翁久允とのゆかりにふれつつ」を開催した。翁の孫で翁久允財団(富山市)の須田満代表理事から展示資料の提供を受ける際、未整理となっている書簡や日記、絵画など約1万点が保管されていることが分かり、その中に今回の書簡が含まれていた。

翁の交友関係は、富山市出身の直木賞作家源氏鶏太や、射水市出身の日本画家郷倉千靱、立山町出身の文芸評論家で日本芸術院会員の佐伯彰一氏ら多岐にわた

翁久允(おきな・きゆういん)

立山町出身のジャーナリスト、作家。1888(明治21)年に生まれ、1907(同40)年に19歳で渡米した。日系人向け新聞に小説などを発表し、「移民地文芸」の先駆者となる。24(大正13)年に帰国し、週刊誌の編集長を務めた後、富山市で同人誌「高志人」を発行し、郷土史の研究などに尽力した。73(昭和48)年、85歳で死去した。

竹久夢二(たけひさ・ゆめじ) 1884(明治17)年〜1934(昭和9)年。岡山県出身で大正時代を中心に活躍した画家。詩人としても名を残す。多くの女性との恋愛が知られる。唯一正式に結婚した岸たまきは、富山市内に墓がある。

同館は2018年度末までに未整理の資料を調べた上で、目録の出版や同館での展示を検討していく。調査を担当する小林学芸員は「夢二やほかの文化人に関する新発見が期待でき、近現代の富山県の文化史にとって重要な資料にもなり得るだろう」と話している。